

阿波山岳武士

剣のふもと

いにしえからの

高貴な歴史が伝わる



阿波の山岳舞



阿波の山岳舞



美しいふるさと

山岳信仰の山として知られる剣山のふもと、神代からの歴史を秘めた木屋平エリアがあります。

阿波の中世文書(徳島県教育委員会)によると、三木家は阿波忌部氏の直系にあたり、朝廷の神事に関わっていました。

三木家のある場所は、以前は麻植郡に位置し、朝廷の神事で使われる麻を植えていました。この麻が大変に上質で、天皇が即位後初めて行う踐祚大嘗祭(せんそだいしょうさい)の折に、麩服(あらたえ)という麻織物を献上していました。これは、天皇が神衣(かむそ)としてまつられるもので、三木家には、この様子を伝える鎌倉時代から南北朝時代に至る古文書が残されています。

麩服の献上は、南北朝動乱以降は中

断していましたが、後に復活して大正昭和、そして平成の大嘗祭においては、木屋平を上げての協力で、立派な麩服を献上しています。

三木氏は、鎌倉時代から戦国時代末期までは山岳武士団の頭領として活躍し、特に南北朝時代には大きな勢力を持つていました。現存する三木家住宅は、江戸時代初期に建てられた徳島県最古の民家で、中世山岳武士の武家屋敷の面影を残す物とされています。この屋敷の傍らには、麩服を織るための道具や貴重な古文書などが展示された三木家資料館もあります。



民俗館資料館



蜻後村上天皇繪旨(宿紙)
『天皇が三木太郎左衛門尉重村の忠節を聞き、まことに神妙である、ますます忠節をつくすようにとの天皇の仰せである、以上を実行せよという感状の繪旨である。』(鎌倉時代から繪旨は墨書き書状の再生紙を、無い場合は墨を入れてすいた薄墨色の紙を使用し、複製できない様にしていた。)

ふるさとワンポイントガイド



三木家第28代当主
三木 信夫さん

三木家は阿波忌部の流れをくみ、その歴史は「日本書紀」にまでさかのぼります。三木家のある木屋平は山深い場所ですが、藤原時代のころの仏像が五体も残され、いかに古くから高度な文明が栄えていたかがわかります。阿波忌部や木屋平の歴史には、日本史の興味深い謎が隠されています。